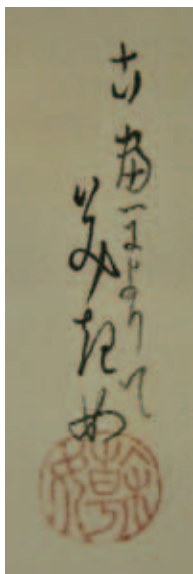


「田家の図」と菅美記子の生涯

米田文孝

1. はじめに

2014年、鳥取県立博物館で開催された没後50年展を契機に再評価されつつある菅楯彦（1878～1963年）は、北野恒富と並び、近代大阪画壇を代表する画家とされる。楯彦は大正6（1917）年、人気絶頂期の名妓である南地（難波新地）宗右衛門町の富田屋八千代と結婚し、世間を驚かせた。漸く世間に名が出始めたとはいえ、八千代と市井にある一画家・楯彦との結婚は、人びとを大いに驚かせた。今回、この菅美記子（八千代の本名）が描いた可能性がある絹本淡彩画の紹介を通じ、その38年という短い生涯（1886～1924）との関連性を垣間見たいと思う。



本作品は三段表具の軸装で、風袋は白紙の押風袋、軸先は根来塗様の塗木で設えられている。桐箱（合箱）に納められ、箱書はない。しかし、所有者が貼付したらしい「菅夫人筆 田家の圖」と墨書された題簽があることから、ここでは本作を田家（田舎の家）の図として話題を進める（写真1）。

まず、本紙（縦37.0cm ×



写真1 「田家の図」と落款

横41.5cm）の中央には、遠方に山並みを望む藁葺の小家屋が描かれ、屋内に設けられた炉には鍋が吊され、周囲には籠や箆らしき道具が見える。窓辺には赤子に乳を含ませる、ふくよかな女性が座しており、その視線の先には犬が一匹うづくまり眠る。

屋外には外壁に立てかけられた竪杵と接して置かれた臼、反対側には鮭らしき大ぶりな魚が3尾、干物にするためか、物干竿に並べ吊されている。本紙の左上方には、「古へによりて美起女」の墨書と、朱文円印の氏名印「幹女」が捺されている。後述する新聞記事にあるように、楯彦の妻女となった遠藤美記子はその晩年、「幹子」も用いていたらしいことに注目すると、本作はその晩年作であろう。

本作以外で美記子が描いたことが明らかな作品には、政治・社会の諷刺漫画で知名の岡本一平が、友人の吾八と八千代の宴席で葉書に描いてもらった人物画がある（写真2）。一見客かつ俄大尽である両人が八千代と面会するまでに要する時間と所作について、時系列に従って一平が記した軽妙洒脱な「富田屋八千代を観るの記」の文面に笑いを誘われる。

文中で一平は後述する八千代の絵葉書の容貌から、「嬌音艶めかしくも亦玉を転はす如く」でなければと想像していたが、八千代の第一声「お、けに」のかすれた塩辛声に驚き、「競売やが風邪を引いて引籠って居る徒然に浪花



写真2 八千代の描いた李白図

節を唸ってる時の声」、「水銀を飲まされた浄瑠璃の大夫が商売替をして雪駄直しの呼声をやる時の声」と評した。また、八千代の小柄な体軀

などについて論を巡らせているが、初対面の印象を「的確に二重に縊れ居る彼女の二重脣は微紅を帯び恰も春石を抱く春の花の柔かく温かく睫を沿て香ひかゝり乱れかゝり」と表現している。このとき八千代本人が当年29歳と伝えたことから、李白図は大正4（1915）年に描かれたものである。富田屋の当主・矢田市兵衛に身を引くと伝えていた、八千代が30歳を迎える前年の出来事である。

このように、岡本一平が東京から遠路、伝を頼ってまで富田屋八千代を觀に来阪した理由の一つに、八千代を題材とした絵葉書の流布がある（写真3）。置屋「伊丹幸」から出ていた豆千代は後に八千代の姉芸妓となるが、八千代より五つ六つ年長であった。この豆千代を神戸の富豪・光村利藻が落籍した。光村は海運業で財をなした光村弥兵衛の長男で、道楽から大阪北浜で関西写真製版印刷合資会社を経営した。後年、美術印刷の光村と評されるようになるが、当時は歌舞伎役者や名妓の写真に彩色した絵葉書売り出していた。やがて日露戦争が始まると、光村は軍の慰問用にと妻の妹芸妓・八千代の絵葉書を10万枚寄付した。この絵葉書が八千代を全国的なスターに押し上げた。

ちなみに岡本一平の妻は歌人・小説家で仏教研究家の岡本かの子であり、歌集では『かろきのみ』、『愛の悩み』、小説では『鶴は病みき』、『生々流転』などを発表した。また、長男は前衛芸術家で、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会のシンボル「太陽の塔」を制作し、「芸術は爆発だ！」と叫んだ岡本太郎である。

さて、富田屋八千代こと遠藤ミキは明治19（1886）年、中河内郡西六郷村（現・東大阪市本庄付近）の農家・西田安次郎の四女・ミキとして生を受けた。ミキが誕生する前年、明治18（1885）年の淀川大洪水で家屋田畑を失った西田家は、堀江（現・大阪市西区）に移って両替



写真3 八千代の絵葉書

商を営むようになった。しかし、新たな家業も順調ではなく、明治27（1894）年の正月、8歳になったミキは置屋「加賀屋」の養女に出され、その姓が西田から遠藤になった。

ミキは加賀屋の斜め向かいにあり、三津寺町の「坂口楼」と並ぶ大茶屋「富田屋」の12代目・矢田市兵衛にかわいがられ、琴三弦をはじめ芸事を学んだ。やがて13歳になった明治32（1899）年、ミキは八千代としてお座敷に出ることになり、16歳には一本（一人前）の芸妓となった。20代に達した八千代は熟達した遊芸やきつぷがよい気性などから、東京赤坂の万竜、京都祇園の千賀勇とならぶ三大名妓と評されるようになった。大大阪と呼ばれた昭和前期は花柳界の全盛期、八千代は五花街にお茶屋500軒、芸妓4000人といわれたその頂点を極め、小八千代や千代葉など、妹芸妓だけで30名に達した。

劇作・小説家の長谷川時雨は、「ささや桃吉、春本万竜、照近江お鯉、富田屋八千代、川勝歌蝶、富菊、などは三都歌妓の代表として最も擢ている女たちであろう。（中略）当時大阪の人にいわせると、日本には、富士山と、鴈次郎（大阪俳優中村）と、八千代があるといった」と、後年『明治美人伝』に記した。米国から帰国中の野口英世をはじめ、八千代は著名人の宴席で舞う機会も増えた。八千代については喜劇俳優の曾我廼家五郎や若き日の松下幸之助なども、その印象を書き残している。

矢田市兵衛は芸妓の教養を高める目的で、舞妓や芸妓に茶華道や日舞、和歌・俳句などを学ばせることにも熱心であった。絵画の素養も重視したが、その師に招いたのが楯彦であった。馴れ初めは大正元（1912）年、明治天皇の崩御と大葬にともなう歌舞音曲の停止と約二ヶ月間に及ぶ休業時、市兵衛が芸妓に絵を修得させようと、親しくしていた楯彦に声をかけたのがきっかけである。しかし、時がたつにつれて熱心に絵を習い続けたのは、八千代ひとりになったという。このような経緯もあり、やがて楯彦は同年の知友、染織家・龍村平蔵などを介して、反対もあるなか八千代との結婚に漕ぎつけた。

八千代の結婚は新聞記事でも報じられ、大正6（1917）年2月1日、富田屋八千代は遠藤美記子として楯彦との婚礼をととのえた。明治11（1878）年生まれの楯彦とは、八つ違いの夫婦

であった。当時、上本町にあった楯彦の自宅二階での神前挙式には新郎新婦、媒酌人（龍村平蔵夫妻）、楯彦の母・妹、富田屋夫婦（矢田市兵衛・お柳）、立会人（岡本大更夫妻）の10名が出席しただけの、簡素で床しい祝言であった。後年、楯彦は「こいつがわしに惚れて、女房にしてと押しかけてきよった」と、自慢げに語っていたという。

この結婚を機に、それまで中堅の画家であった楯彦は広く世に知られるようになった。富田屋八千代が手鍋提げて押しかけた天下の果報者とは、どのような男であるのか、世間の好奇心が高まった。ときには美記子との結婚による妬みから誹謗中傷されることもあったが、楯彦は美記子をモデルにして作品の制作に邁進し、一段と腕を上げたと伝わる。

大正12（1923）年には、二代目市川猿之助の斡旋により東京・日本橋の三越本店で菅楯彦個展が開催され、東京でも楯彦の知名度は高まった。この個展の開催準備のため美記子は幾度か単身上京し、現役時代の縁で東京在住の有力者に個展の後援を依頼する挨拶廻りに奔走した。さらに、個展に続き楯彦の郷里である山陰旅行などが重なり、美記子の死期を早めた。

美記子は献身的に楯彦と亡父・菅大次郎（盛南）の妻・ツネに仕えた。武家の娘である義母は昔気質であり、芸妓として身についた美記子の立ち振る舞いや言葉遣いなどに対して、何かと口うるさかったという。楯彦の友人・谷崎潤一郎は、「みきさん、しゅうとめさんの前では、いつも手をついてもものを言っておった。なれない炊事・洗濯で、ひび・あかざれだらけになりながら、孝養を尽くされた。どんな金持ちや偉い方の奥さんにもなれた彼女の姿に、涙ぐむ者は多かった。そのせいか楯彦はみきさんが早世したあと、死ぬまで妻女はもたなかった」と語っている。

楯彦との婚姻生活の当初から、芸妓時代からの持病である鉛毒症と腎臓疾患により虚弱な美記子であった。楯彦は美記子をともない、和歌浦の和歌山紡績社長・土生信一氏の別荘をはじめ転地療養を重ねたが、次第に床に就く日が多くなっていった。薬石の効なく大正13（1924）年2月25日、東成郡天王寺村（現・阿倍野区松崎町）の自宅において、腎臓炎により38歳の波

乱の生涯を閉じた。美記子の遺言は、「死顔を人に見せて下さるな」であったという。



写真4 菅美記子の逝去を報じた新聞記事
（大阪朝日新聞・1929年2月26日朝刊）

その訃報は新聞記事として掲載され、元富田屋八千代の長逝は、世人にも広く伝わり惜しまれた（写真4）。明治12（1879）年、楯彦生誕の翌年に大阪・船場に生まれた俳人・青木月斗は、「白玉の八千代椿は落ちにけり」と詠み、その死を悼んだ。後年、富田屋八千代の生涯は「天野屋利兵衛」「実川延若」などで知られる劇作・演出家の郷田憇の手により大阪歌舞伎座で上演され、数多くの八千代伝説とともに、長く惜しまれ語り継がれた。

2月27日に執り行われた美記子の葬儀は、参列者が500人を超えた。楯彦は、「手鍋提げて並の嫁はんになりたかったのやろうに要らん学問させて済まなんだ」と涕泣したという。後年、北野恒富が妻を亡くしたとき、通夜の席で号泣する恒富に、「親を亡くして悲しめば孝子、子を失って悲しめば慈父慈母、友を失って悲しめば友情の深さをほめられるが、女房をなくして泣けば阿呆といわれる。どもならん」と冗談に託して慰めた。しかし、「私にも覚えがある。その当時、家に帰ってこれが自分の家だったのか、と思うたものだ」と述懐したという。

楯彦は美記子を喪った思い出の縁に、近い人びとに木製高台付盆を配った。この春慶塗の木製盆（直径25.5cm、高さ5.0cm）は、楯彦が「忍艸 菅楯彦」と墨書した青緑の麻袋に入れられ、鱧皮模様の貼紙の木製箱に収められている。その高台内面には長方形の焼印で「甲子初夏」（1924年）と捺されており、美記子の没

後約3か月して製作されたいらしい。また、木製盆の見込には黒漆で楓と月が描かれ、同じく黒漆で「さみしさに笙とりつゝも庭にいて 桜とともに一夜あかしぬ 美記女」と短歌が添えられている(写真5)。美記子は結婚前から国学者・篆刻家の近藤尺天を師として熱心に和歌を詠んでいたが、この短歌は美記子の文箱に納められていた遺詠である。



写真5 木製盆と美記子遺詠の短歌

美記子の遺骨は楯彦の手で四天王寺に埋葬された。昭和38(1963)年9月、美記子と死別してから約40年、清貧で高潔な人柄から「白木の神殿」とあだ名された楯彦は、85歳の天寿を全うした。臨終の床にあった楯彦は美記子の着物を遺骸に掛けてほしいと願ったと伝わる。

楯彦の逝去により、美記子は楯彦との新たな墓に納められるため改葬された。現在、美記子の初葬墓碑は、四天王寺境内にある無縁墓北面に組み置かれている。墓碑正面には近藤尺天による「菅美記子奥城」、左側面には「夫楯彦(以下不明)」と刻まれる。この無縁墓は、その頂上に安政元(1854)年11月4・5日、相次いで発生した安政東海・南海地震による犠牲者を供養し後世に伝え警告する「安政地震津波碑」があることでも知られる。

美記子と楯彦の墓所は、大阪市設南(阿倍野)墓地に建立された。大阪商法会議所(現・大阪

商工会議所)を設立した、五代友厚の墓所に近接した場所である。菅家の家督を継いだ甥の菅真人が建立した墓碑の正面には、「菅楯彦 菅美記之墓」、裏面右側には「天真院秀彩楯彦居士 昭和三十八年九月四日寂 俗名藤太郎 行年八十六才」、同じく左側には「天麗院秀室妙美大姉 大正十三年二月廿五日寂 俗名ミキ 行年三十八才」と刻まれ、美記子は永久の眠りに就いた(写真6)。



写真6 菅楯彦・菅美記の墓碑

このようにみると、本作は一世を風靡した名妓富田屋八千代が遠藤美記子として楯彦に嫁いだものの、心労を重ね病魔にも侵され、望んだ夢が叶わないことを悟った心象風景を描出したものではないかと夢想するのみである。

【主要引用・参考文献】

- 岡本一平1929、「富田屋八千代を觀るの記」『一平全集』第9巻、先進社
 鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅楯彦展』、同博物館
 西浦香橋1986・87、「菅楯彦先生(一)～(三)」『大阪春秋』第48～50号、大阪春秋社
 長谷川時雨2009、「明治美人伝」『長谷川時雨作品集』藤原書店
 三田純市1980、「富田屋八千代」『道頓堀物語』、光風出版社
 三善貞司2006、「なにわ人物伝 楯彦・八千代」(1)～(3)、『大阪日日新聞』、ザ・プレス大阪

なお、短歌の翻刻には関西大学文学部小倉宗氏、関西大学博物館上原康生氏にご教示を賜った。銘記して篤く感謝申し上げます。

博物館長 文学部教授